

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520350

研究課題名（和文）古代語出来文の格体制に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Preliminary Research on Case Structures of Emergence Sentences in Classical Japanese

研究代表者 川村 大 (KAWAMURA FUTOSHI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：50234133

研究成果の概要（和文）： 古代語の多義形式として知られる、動詞にいわゆる助動詞ル・ラルが下接した形や動詞見ユ・聞コユ・思ホユ／思ユなどを述語とする文について、『源氏物語』を中心に格表示の実例をデータベース化し、意味と格表示の関係を検討するための基礎資料を作成した。また、一部動詞については、当該動詞の助動詞ル・ラルを伴わない場合の格表示の実例を収集し、ラレル形との対照が図れるようにした。

研究成果の概要（英文）： This is a preliminary research on the relation between meaning and case structure of verbal form $V-(r)aru$ and verbs *miyu*, *kikoyu*, *omofoyu/oboyu*, which are known as polysemous forms. These forms basically mean spontaneous, potential, passive and honorific. We have made databases on examples related to the case structures and the theta-roll of above-mentioned forms in *Genji Monogatari*. To compare with this data, the examples of several verbs without $-(r)aru$ have also been collected.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	450,000	2,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：国語学、言語学、文法、古代語、出来文、受身、自発、可能

1. 研究開始当初の背景

ここでいう「出来文 emergence sentence」とは、動詞のル・ラル（ユ・ラユ）下接形（以下、「動詞ラレル形」）および動詞見ユ・聞コユ・思ユなどを述語とする文のことである（尾上圭介 1998-99, 2003、川村大 2005）。これらの文は受身・自発・可能などを表す多

義形式であることが知られているが、また同時に、対応する形式（動詞のル・ラル非下接形や動詞見ル・聞ク・思フ）を述語とする文（以下、「対応する文」）との間に、規則的な格体制の異なり（いわゆる格交替）が有ることが知られている。

現代語においては、動詞のレル・ラレル下

接形が受身文を構成する場合に関して、格交代現象の実態が相当程度明らかになっている。たとえば、どの種類の動詞が受身文述語になり得るか（直接受身文の場合・間接受身文の場合）、対応する文（能動文）のどの名詞項目が受身文の主語になるか（その場合の名詞項目はヒトか、モノか）、対応する文（能動文）の主語は、受身文ではどの形式で表示されるか（ニ・カラ・ニヨッテ……）、などである。また、自発文・可能文の場合に関しても、受身文ほどではないものの、対応する文との間の格交代に関して、ある程度の知見が得られている。

しかしながら、古代語に関して言えば、一部の限定されたテーマ（非情物主語の受身など）に関して実態調査はあるものの、自発文・可能文を含めた出来文の全例を対象とした調査は未だ為されていない。このことが、受身文化・可能文化などのいわゆるヴォイス現象を手がかりとする本格的な古代語動詞研究を展開する際の一支障となっている。

2. 研究の目的

古代語の動詞ラレル形および動詞見ユ・聞コユ・思ユなどを述語とする文、すなわち出来文の格体制を資料に即して調査し、その実態を明らかにする。具体的には下記のとおり。

(1) 『源氏物語』（できれば『万葉集』）に用いられている出来文の全例について、次の点を調査する。

- ① 述語動詞の種類（動詞ラレル形について）
- ② 動作主項目・動作対照項目が文中に現れる実例と、その格表示
- ③ 対応する文の格体制と、出来文で主語になり得る名詞項目の格

(2) 調査結果をデータベース化する。

3. 研究の方法

(1) 用例の収集・データ化

- ① 調査には下記のテキストを使用した。長瀬真理ほか(1990)「日本語－英語対照『源氏物語』のテキスト・データベース」（東京女子大学情報処理センター）所収『源氏物語』ファイル（底本：日本古典文学全集（小学館））ただし、句点と鍵括弧（「」）ごとに改行するよう加工した上で用いる。加工・検索には佐野洋氏提供の CLT00L を用いた。
- ② 出来文（全例）の用例を抽出し、述語動詞の種類・動作主項目の表示法などを調査、データベース化する。

データは、該当する例文のほか、巻名（桐壺・帚木 等）、「日本古典文学全集」におけるページ数、述語動詞の終止形、用法名（受身・自発・可能・尊敬）、動作主項とその格表示、動作対象項とその格表示、などのデータを1件として構成される。

③ 出来文に用いられる動詞のル・ラル（等）非下接形を述語とする文（「対応する文」）のうち、幾つかについても同様の調査を行う。

④ 作業にあたっては、補助員を雇用する。

(2) 古代日本語・日本語文法等関連文献の収集

(1)の作業に際し、古代日本語や日本語文法・他言語の文法に関する近時の知見を得るため、近時新たに出版されたものを中心に、古代日本語・日本語文法・他言語の文法に関する図書や関連する雑誌論文（動詞、ヴォイスに関するもの）を収集する。

4. 研究成果

『源氏物語』の出来文の用例については、見ユ・聞コユ・思ユの例も含め、ほぼ所期の調査目的を達成した。

一方、対応する文の用例については、「自動詞の受身」「非情の受身」といった議論で問題になる幾つかの動詞（越ゆ」「騒ぐ」「笑ふ」「たなびく」「吹く」「建つ」など）についてデータを作成するに留まった。今後も調査を継続する予定である。

研究成果の一部は、5. に示した論文で公表した（本件調査とは別途行った、『万葉集』などの上代文献、および三代集に関する同様の調査結果を含む）。今後も論文等を通して研究成果を公開する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 川村大「古代語出来文における尊敬語の待遇対象——出来文の「主語」とは何かを考えるために——」紫式部学会編『源氏物語の言語表現 研究と資料—古代文学論叢第十八輯—』武蔵野書院 2009 81-97（査読無し）
- ② 川村大「古代日本語における受身表現」『語学研究所論集』14号 2009 97-111（査読無し）

- ③ 川村大「『見ゆ』『聞こゆ』『思ほゆ・思ゆ』の格体制—動詞ラレル形との対照の観点から—」『東京外国語大学論集』77号 2008 370-351 (査読無し)
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/50396>

[その他]

川村大「動詞ラレル形とその周辺」日本語学会夏期講座講義（日本語文法論B（中上級））（2008年8月9日～24日）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川村 大 (KAWAMURA FUTOSHI)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：50234133